

電子体温計による腋窩体温と前額部深部温との比較検討

遠藤 芳子¹⁾、武田 淳子¹⁾、大池 真樹¹⁾、丸山真紀子¹⁾

キーワード：電子体温計、体温測定、予测温、実测温、前額部深部温

要 旨

体温測定は現在ほとんどが電子体温計で行われている。電子体温計の中には、予测温のみならず実测温も測定できるものがあるが、一般には、予测温を実测温とらえている実態があるのではないかと疑問を持った。今回、健康な成人25人を対象として、電子体温計を用いて左右の腋窩にて予测温と実测温の測定を行い、深部温測定器による、前額部深部温と比較することによって、電子体温計を使用する上での課題を明らかにすることを目的として研究を行った。

結果、予测温と実测温の比較では、右腋窩の予测温が有意に高かった。予测温と深部温値の比較では、右腋窩の予测温が有意に高かった。実测温と深部温値の比較では、左右腋窩とも有意差は無かった。

以上から、約10分間の測定による実测温が深部温値に近い値として得られたため、電子体温計でも10分間の測定が望ましいこと、臨床において発熱と判断して対応する場合は、体温計の示す値のみではなく、患者の症状や反応を総合的にみていくことが重要であることが示唆された。

A Comparative Study of Axillary Temperature Measured by an Electronic Clinical Thermometer with the Deep Body Temperature Measured at the Forehead

Endo Yoshiko¹⁾, Takeda Junko¹⁾, Ohike Maki¹⁾, Maruyama Makiko¹⁾

Key words : electronic clinical thermometer, measurement of body temperature, estimated temperature, measured temperature, deep body temperature of the forehead.

Abstract :

Today, electronic clinical thermometers are frequently used to take temperatures. Some of these thermometers take both estimated and measured/real temperature readings. This study investigated the differences if any that occur between estimated and measured/real temperatures when using an electronic clinical thermometer.

The estimated and measured/real axillary temperatures of 25 healthy adults were taken using an electronic clinical thermometer, and then these readings were compared with the reading of their deep body temperature measured at the forehead.

The results were:

1. the right estimated axillary temperature was higher than the measured/real right axillary reading. The left axillary readings showed no difference.
2. the right estimated axillary temperature was higher than the measured/real deep body temperature reading. The left axillary readings showed no difference.
3. the measured/real axilla readings (both left and right) and the deep body temperature measured at the forehead showed no significant difference.

From these results it can be recommended that when measuring axillary temperature the measured/real reading should be obtained (taking 10 minutes). As far as assessing a patient's febrile condition to make clinical decisions, hospital staff should not rely only on temperature readings, but should also consider a patient's overall symptoms and responses.

1) 宮城大学看護学部看護学科 (Miyagi University School of Nursing)

はじめに

体温測定は、看護学において重要な基礎技術とされており、教科書などにおける腋窩での測定では、体温計の端が腋窩中央部に位置するように、体前方より後方上に向かって挿入し、肘関節を軽く曲げ、上腕を前胸部よりに、胸部に密着させて腋窩を閉じて10分以上測る¹⁾となっている。これは、水銀体温計での体表面温度の正しい測定方法である。しかし、現在は、電子体温計で体温測定されることが多くなり、外来においても、電子体温計の1回目のアラーム音によって体温と判断している。

池田ら²⁾によると、水銀体温計から電子体温計へと移行した理由として、水銀体温計が破損しやすくガラス破片で手を損傷する危険があること、有機水銀ではないが水銀が金属であり、数百度以上で肺からの吸収や誤嚥によつての危険性があることが挙げられている。このため、1970年代後半から短時間で測定が可能で、水銀を使用しない体温計の開発が行われた。そして、電子体温計が開発され、1983年に医療用、1984年に家庭用が発売されて以降、病院や家庭における検温のほとんどが電子体温計によって実施されるようになった³⁻⁷⁾。体温の測定部位は、心臓から大動脈に流れる血液の温度が最適であることから⁸⁾、いずれの機器を用いる場合でも、体温測定部の近傍を動脈が走行しており、深部の温度を伝える場所であること⁹⁾が適切とされている。また腋窩温や皮膚温は、0.1~0.3℃の左右差がある⁹⁻¹¹⁾ため同側で測定し、腋窩動脈の温度を測定するためには正しい位置に体温計を挿入し、一定時間測定しなければならない¹²⁾とされている。

大人が発熱を感じた場合、自分の判断で体温測定を行い、有熱時には自分で対処行動を起こすが、その大人の判断に左右される小児の体温において、電子体温計の特性や正しい測定方法を知らないために低体温騒動や微熱騒動¹³⁻¹⁸⁾が起きたことがある。この騒動のあと梁¹⁸⁾は、実際に小学生の体温計測を実施し、「小児保健領域で低体温とよんでいる36℃未満の者もけっして増加しているとは考えられない。この問題の大半は体温測定法に起因していると考えられる」とし、電子体温計によ

る測定方法を指導しても家庭での測定方法が徹底されていないために口腔検温値に比較して低い体温値が出ると報告している。さらに、JIS規格品とそれ以前の製品で体温測定値を比較した結果、38℃以上の発熱では差があまり見られないが、37.5℃以下ではJIS規格品のほうが高く(正確に)出たため、「JIS規格品の普及により低体温は以前の1/3となり、今後逆に微熱騒動が起こる可能性も否定できない」と述べている。測定方法や使用する機器によって、低体温または微熱になるということから起こる不安を除くためには、実際に電子体温計を用いて予測値や実測値を調べ、核心温と比較してみるのが良いのではないかと考えた。しかし、核心温は体内にカテーテルを挿入しての実験となるため不可能である。したがって、肺動脈温(核心温)の変化に追従することが証明されている¹⁹⁻²¹⁾深部温と比較することとした。先行研究では、水銀体温計と電子体温計の比較²²⁾や電子体温計での予測値と実測値を比較検討したものの²³⁾はあったが、深部温と電子体温計による測定値を比較検討したものは皆無であった。

電子体温計には、1回目のアラーム音で予測温を、2回目のアラーム音が実測温を示すものが販売されている。テルモ研究所の調査によれば、正しい体温測定を行っている者は約3割で、電子体温計の測定方式として、実測式と予測式があることを理解している者は少なく、実測式体温計で10分間測定している者は、わずか2%であったとの結果を報告している²⁴⁾。予測機能とは、「最終到達温度(平衡温)に達するより早い時点で、計算によってその温度を予測して表示する機能²⁵⁾」と定義されており、電子体温計の予測値は、多数の測定値のデータを分析し、体温測定開始直後から温度上昇カーブの傾きと温度の上限(平衡温)との間に一定の相関関係があることから、それをアルゴリズムとして実際の検温時の上昇カーブから60~90秒の間の平衡温を演算予測したものである²³⁾。今回、正しいとされている体温測定方法によって電子体温計を使用し、左右の腋窩にて予測温と実測温の測定を行い、その値と深部温測定器による前額部深部温値と比較検討を試みたので報告する。

目 的

電子体温計を用いて、予測値と実測値、予測値と前額部深部温値、実測値と前額部深部温値の比較検討をし、電子体温計を使用するうえでの看護の課題を明らかにする。

用語の定義

本研究において、以下のように用語を定義する。

1. 電子体温計の予測値

最終到達温度（平衡温）に達するより早い時点で、計算によってその温度を予測して表示された電子体温計による体温の値とする。

2. 電子体温計の実測値

電子体温計によって検知された最終到達温度（平衡温）の値とする。

3. 核心温

循環調節や生体の外層部に影響する環境への熱放散の変化によって変わることのない生体内部の組織の温度とする。

4. 深部温

生体の深部の温度の意味であり、今回は、深部体温計で測定された温度とする。

研究方法

1. 対象者

研究協力について、自主的な参加を募った結果、対象者は男性5人、女性20人の計25人であった。年齢は20歳～56歳で、平均 37.4 ± 11.8 歳であった。20歳代は7人、30歳代は8人、40歳代が4人、50歳代が6人であった。

2. 実施期間

2007年12月から2008年3月。

3. 実施条件

1) 時間帯

13時30分から18時。体温は日周期（サーカディアン・リズム）があり、この変動の差は $1 \sim 2^{\circ}\text{C}$ といわれている²⁶⁾が、今回は、同じ対象者における体温の変化であるため、日周期については考慮に入れないこととした。

2) 実験場所と室温

研究者の研究室で実施した。室温は、 24°C から 26°C に調整した。

3) 使用機器

(1) 電子体温計

オムロン社製電子体温計MC-671（医療用具許可番号24BY0001）で、この電子体温計は、そのまま計測し続けると実測となるタイプで、計測開始後1回目のアラーム（平均30秒）で予測温を示し、2回目のアラーム（約10分）が実測値を示すとされている。

(2) 深部温測定器

電子体温計による体温の値と比較するために、熱流補償式体温計であるテルモ社製のコアテンプ（CM-210型）を使用した。プローブは深部温プローブPD3を使用した。この機器は、体表面から深部温を測定し、血行動態のモニターができ、体温変化に追従することが証明されている¹⁹⁻²¹⁾ものである。約10分で平衡温に達するとされているが、今回は20分後の値を安定した値とした。

熱流補償式体温計とは、体表面に測定用プローブを置き、その部位での深部体温を連続的に測定する体温計をいう。プローブの中にヒータが入っており、深部と体表面間の熱流を打ち消すようにヒータを制御することで、体表面において、その部位における深部温を測る。熱流補償法とは、通常、体表面は外気温の影響を受け、深部の温度より低くなる。しかし、体表面を断熱材でおおって外気温の影響を防ぐと、体表面は深部と等しい温度になることが知られている。この原理を利用し、ヒータと電子回路を用いて皮膚から外気中に放散する熱を遮断することにより、深部温の測定が可能になる。これを総称して「熱流補償法」という²⁷⁾。

4. 実施方法

1) 対象者を安定させる目的で、10分間椅子に座らせ、その後、前額部（深部温測定用コアテンプでは、前額部、前胸部、手掌、足底などどの部分でも測定が可能であるが、絆創膏での固定では途中はがれる危険性があり、長時間安定し

て測定を継続できるのが前額部であるため)にコアテンプのプローブをヘアバンドで固定し、20分間測定を開始する。

2) 同時に電子体温計を使用し、始めに左側腋窩より体軸の下より上に向かって30~45度の角度で挿入して測定し、次に右側腋窩温を測定する。各腋窩で1回目のアラーム音が鳴った時点の温度と2回目のアラーム音が鳴った時点の体温を記録する。

5. 分析方法

得られたデータから、電子体温計による予測値と実測値、電子体温計による予測値と深部温測定器による前額部深部温値、電子体温計による実測値と深部温測定器による前額部深部温値を比較検討するために対応のあるt検定を行った。有意水準は5%とした。

倫理的配慮

申し出のあった対象者に対して、調査の趣旨と意義、調査内容や結果を本調査以外に使用しないこと、自由参加であり、参加や不参加による不利益が生じないこと、参加途中でも拒否できるなどの権利の保証、個人情報保護、対象者の匿名性の保持、情報開示について明記した説明書を提示し、同意書に署名を得た。

また、対象者に対して、長時間座位保持による負担についても説明し、了解を得て行った。

この研究は、岩手県立大学大学院研究科研究倫理審査会の承認を得て実施した。

結果 (表1)

1. 電子体温計による予測値と実測値および深部温測定器による前額部深部温の測定結果

1) 最高値と最低値 (表2)

(1) 予測値

左腋窩温の最高値は38.0℃、最低値は35.9℃であった。

右腋窩温の最高値は38.2℃、最低値は36.5℃であった。

(2) 実測値

左腋窩の実測値の最高値は37.4℃、最低値

は36.2℃であった。

右腋窩の実測値の最高値は37.2℃、最低値は36.3℃であった。

(3) 前額部深部温値

最高値は37.4℃、最低値は36.0℃であった。

2) 左右腋窩温値の差

左右腋窩温値の比較では、予測値で右腋窩温値が有意に高かった ($p < 0.05$)。実測値では有意差はなかった。

3) 平均値 (表1・図1)

(1) 予測値

左腋窩では、平均 $36.96 \pm 0.54^\circ\text{C}$ 、右腋窩では $37.18 \pm 0.48^\circ\text{C}$ であった。

(2) 実測値

左腋窩では $36.81 \pm 0.33^\circ\text{C}$ 、右腋窩では $36.81 \pm 0.29^\circ\text{C}$ であった。

(3) 前額部深部温値

深部温測定器による値は、 $36.69 \pm 0.34^\circ\text{C}$ であった。

2. 電子体温計による予測値と実測値の比較の結果 (図2)

左腋窩では、予測値と実測値の平均の差は、 0.15°C であり、予測値が高い傾向であった ($p = 0.097$)。

右腋窩では、予測値と実測値の平均の差は 0.37°C であり、予測値が実測値よりも高かった ($p < 0.001$)。

3. 予測値と前額部深部温値の平均値の比較の結果 (図3)

左腋窩の予測値が前額部深部温値よりも高い傾向であった ($p = 0.058$)。

右腋窩では、予測値が有意に高かった ($p < 0.001$)。右腋窩の予測値と前額部深部温値の平均の差は、 0.49°C であった。

4. 実測値と前額部深部温値の平均値の比較の結果 (図4)

左右腋窩とも、有意差は無く、右腋窩が少し高い傾向 ($p = 0.065$) であった。平均値の差は、左右ともに 0.12°C であった。

表1. 測定結果

対象	性別	年齢 (歳)	左腋窩 予測値 (°C)	左腋窩 実測値 (°C)	右腋窩 予測値 (°C)	右腋窩 実測値 (°C)	前額部 深部温値 (°C)	室温 (°C)
1	男	20	37.3	36.9	36.8	36.9	36.7	25
2	男	20	37.6	36.9	37.3	36.6	36.7	25
3	男	22	38.0	36.8	37.6	37.1	37.0	25
4	女	22	37.1	36.9	37.2	36.7	36.8	25
5	女	23	36.8	37.2	37.7	37.2	37.4	25
6	男	25	37.1	37.0	37.0	36.9	36.2	25
7	女	27	36.6	37.1	37.4	37.2	37.2	26
8	女	31	37.9	37.2	38.2	37.1	36.7	25
9	女	32	36.9	36.4	37.4	36.4	36.3	25
10	女	36	37.4	37.2	37.2	36.7	36.3	25
11	男	36	36.2	36.5	37.2	36.8	36.8	25
12	女	37	37.0	37.1	37.5	37.2	36.8	25
13	女	37	37.0	37.0	37.2	36.8	36.8	25
14	女	37	37.6	37.4	37.7	37.2	36.6	25
15	女	37	36.3	37.0	37.6	37.2	37.1	25
16	女	40	36.6	36.4	36.5	36.3	36.5	24
17	女	41	37.4	37.0	37.9	37.1	36.7	25
18	女	44	37.0	36.7	36.6	36.5	37.0	25
19	女	47	37.0	36.8	37.4	36.8	37.0	25
20	女	51	36.9	36.6	36.5	36.6	36.0	25
21	女	51	36.3	36.2	36.6	36.4	36.3	26
22	女	53	37.1	36.8	36.5	36.7	36.3	25
23	女	54	35.9	36.2	36.6	36.7	37.1	26
24	女	55	36.1	36.4	36.9	36.4	36.4	25
25	女	56	36.8	36.6	36.9	36.7	36.7	25
平均		37.4	36.96	36.81	37.18	36.81	36.69	
標準偏差		11.8	0.54	0.33	0.48	0.29	0.34	

表2. 電子体温計と深部温測定器による測定結果

	予測値 (°C)		実測値 (°C)		予測値 (°C)		実測値 (°C)	
	Mean	SD	Mean	SD	最高値	最低値	最高値	最低値
左腋窩温	36.96	0.54	36.81	0.33	38.0	35.9	37.4	36.5
右腋窩温	37.18	0.48	36.81	0.29	38.2	36.5	37.2	36.3
深部温	36.69±0.34°C							

考 察

1. 電子体温計による予測値と実測値の比較

JIS規格では、予測値と実測値の誤差範囲が、±0.2°Cと言われている²⁵⁾。しかし今回の結果では、右腋窩温で、予測値が実測値より0.37°C高い値を示していた。この誤差が大きかった要因とし

て、予測式電子体温計は、60~90秒間内で10分後に達すると予想される平衡温度を示すので、今回の実験方法での左腋窩から測定を始めたため右腋窩の内腔が充分温まり、そこから演算した値を出したため高めの結果となったと推測される。松本ら⁶⁾は、内腔化（測定時に上腕を体に密着させて

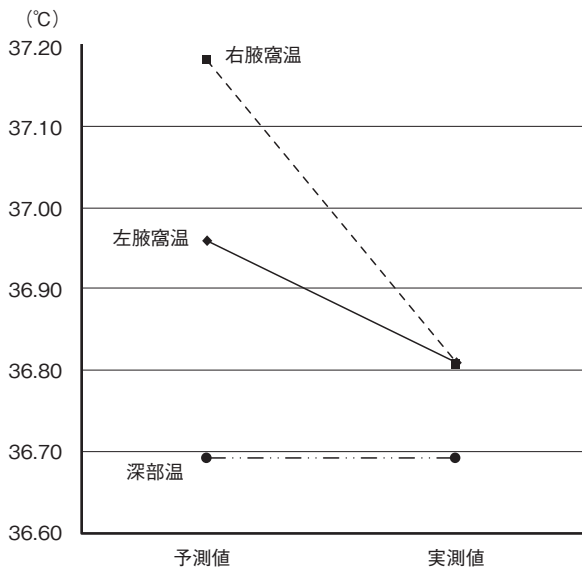


図1 電子体温計と深部温測定器による測定結果

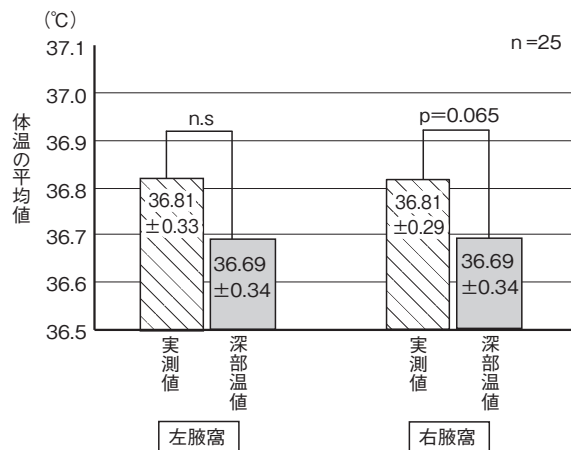


図4 電子体温計による実測値と深部温測定器による前額部深部温値の比較の結果

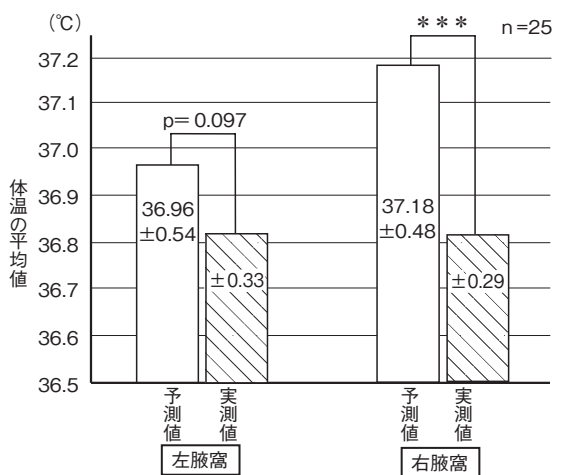


図2 電子体温計による予測値と実測値の比較の結果

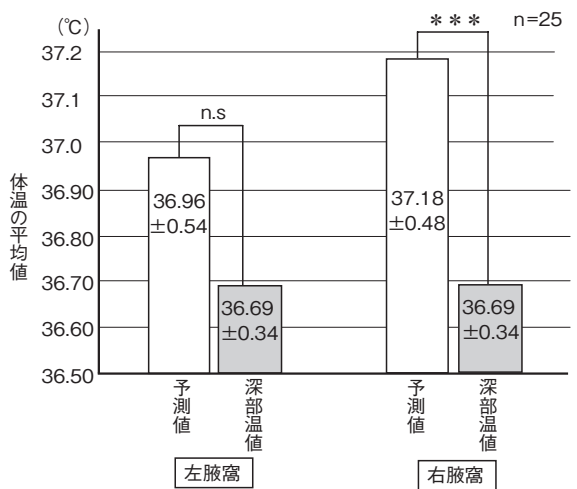


図3 電子体温計による予測値と深部温測定器による前額部深部温値の比較の結果

腋窩温を体の深部の温度に近づけること) 時間に15分以上かかり、内腔化時間が増加することはかえって高めの温度が示され不正確になってしまうことを明らかにしている。

2. 電子体温計による予測値と深部温測定器による前額部深部温値の比較

戸川²⁰⁾によると、前額深部温は肺動脈血温より $0.3 \pm 0.3^{\circ}\text{C}$ 低値であったと述べており、前額部深部温は、核心温よりも低いことが明らかにされているが、右腋窩の予測値が前額部深部温値より、 0.49°C 高い値が出るということは、予測温は核心温よりも約 0.2°C 高いということであり、注目する結果である。1回目のアラーム音で体温と判断する場合は、少し高い値が得られていると認識していることが必要であると考えられる。

3. 電子体温計による実測値と深部温測定器による前額部深部温値の比較

戸川²⁰⁾は、「前額部深部温と舌下温との差は 0.1°C 程度であり、鼓膜温とは平均の差はなく、標準偏差が 0.3°C であったことから、臨床的には前額部深部温は体温の指標として信頼できると考えられている」と述べている。したがって、今回電子体温計によって測定して得られた実測値は、前額部深部温と有意差がなかったため、体温として信頼できる値と考えられる。しかし、前額部深部温は、今回室温を $24 \sim 26^{\circ}\text{C}$ で実施したために低く出

ている可能性があることも考えられた。

4. 電子体温計を使用する場合の課題

臨床において、予測値を体温として記録する場合は、実測値や前額部深部温値よりも高い値に出ることを念頭におかなければならないと考えられる。また、実測値と前額部深部温値の差は0.12℃程度であり、電子体温計による約10分間計測が前額部深部温値により近いと考えられた。

最初のアラーム音で示されるのは予測値であるため、約10分間かけて、実測値を測定してみることが望ましいと考えられる。

臨床において、体温が38℃以上の時に解熱剤などの投与が指示されている場合があるが、処置を実施する場合、発熱のみではなく、適切な判断が求められる。発熱とともに出現する症状の変化や患者の反応を確認しながら、これからさらに上昇していくことが予測される体温であるのかということや早期対処の必要な状態であるのかについて、慎重に判断する必要がある、患者の反応を観察し、総合的に判断して対処していくことが重要である。

本研究の限界

深部温は本来、核心温に近い値と考えれば、もっと高温に出るのではないかと考えられ、テルモ研究所に問い合わせたところ、深部温値が外気温の影響を受けている可能性があるというコメントをいただき、外気温への考慮が必要だったのではないかとということや左側から開始したための偏りの可能性があることが考えられ、今後、実験をする時の室温を高く設定してみることや右側から測定を開始してみるなどの試みを重ねていく必要がある。

結 論

今回、電子体温計を用いて腋窩温を測定し、予測値と実測値、予測値と前額部深部温値、実測値と前額部深部温値の比較検討をした結果、

1. 電子体温計による予測値と実測値を比較した結果、左腋窩では、予測値が高い傾向にあり、右腋窩では、予測値が実測値よりも有意に高

かった。

2. 電子体温計による予測値と前額部深部温値を比較した結果、左腋窩の予測値が前額部深部温値よりも高い傾向であり、右腋窩では、予測値が高かった。
3. 電子体温計による実測値と前額部深部温値を比較した結果、左右腋窩とも、有意差は無く、右腋窩では少し高い傾向であった。

電子体温計を使用するうえでの課題は、実測値が前額部深部温値に近い値が得られたことから、電子体温計を用いて体温測定をする場合は、約10分間測定することが望ましいこと、臨床において発熱と判断して対応する場合は、体温計の示す値のみではなく、患者の症状や反応を総合的にみていくことが重要であることが示唆された。

謝 辞

本研究に賛同し、ご協力をいただいた対象者全員に深謝いたします。

本研究は、平成20～22年度文部科学省科学研究補助金（基盤研究（C）課題番号20592590）の助成を受けて実施している関連研究の一部を論文にまとめたものである。要旨については、第28回日本看護科学学会（平成20年12月14日）にて報告した。

引用文献

- 1) 宮崎和子監修：[改訂版] 小児 I. バイタルサインの観察と測定. B体温. 75、中央法規、2000
- 2) 池田 誠、小澤 仁：水銀体温計から電子体温計への挑戦. 体温のバイオロジー 体温はなぜ37℃なのか. 162-168、メディカルサイエンス・インターナショナル株式会社（東京）、2005
- 3) 戸川達男：体温測定器. 小児看護、10（10）、1193-1166、1987
- 4) 体温計の歴史. テルモヘルスケア情報局〔健康情報〕2008年10月31日
<http://www.terumo-taion.jp/temperature/index.html>
- 5) 梁 茂雄、小名博子、田原 悌他：「5秒間で測定できる腋窩体温計」の小児科領域での使用

- 経験. 小児看護, 26 (13)、1825-1826、2003
- 6) 松本舞子、細野恵子、留畑寿美江他：予測式体温計を用いた腋窩温測定-腋は温めるのか？汗は拭くのか？-. 臨床体温, 24 (1)、56-58、2006
- 7) 竹内敏雄、板倉洋治、鈴鹿隆久他：本邦一般家庭における小児の体温測定に関する検討. 日本小児科学会雑誌, 7 (2)、381、2003
- 8) 藤本悦子、今本喜久子：フィジカルアセスメントのための体表解剖学. 臨床看護11ケア技術のエビデンス, 28 (13)、1894-1905、2002
- 9) 平 孝臣、鈴木玲子編集：わかるバイタルサインA to Z. 19-27、学習研究社, 2000
- 10) 遠藤芳子、松永保子、沼沢さとみ他：温湯清拭による前腕皮膚温変化の測定-清拭直後に乾布で水分を拭き取る科学的意義-. 山形保健医療研究, 2、41-44、1999
- 11) 丸山仁司：リスク管理 バイタルサイン. 理学療法科学, 20 (1)、53-58、2005
- 12) 小沢道子、片田範子編：標準看護学講座 小児看護学29 第3章 健康障害を持つ小児と看護 F. 小児に必要な看護技術 体温. 301、金原出版、1994
- 13) 梁 茂雄：子どもの正常体温とは. チャイルドヘルス, 1 (3)、38-39、1998
- 14) 梁 茂雄：発熱. 特集クリニカル・サインのチェックポイント. 小児看護, 23 (9)、1190-1194、2000
- 15) 正木健雄：子どもの「低体温」問題の実態-体温調節機能の未発達-. 学校保健フォーラム, 2 (3)、15、1998
- 16) 佐田智子：AERA：電子体温計が生む低体温児騒動-電子大国日本の風景-. AERA, 5 (18)、46-49、1992
- 17) 朝山正己：低体温を考える. 体温のバイオロジー 体温はなぜ37℃なのか. 91-95、メディカル・サイエンス・インターナショナル株式会社 (東京)、2005
- 18) 梁 茂雄：小児の低体温化. 小児科, 39 (1)、61-69、1998
- 19) 辻隆之、中島一己、竹内靖夫他：身体各部の深部温とその特徴. 自律神経, 13、220-226、1976
- 20) 戸川達男：体温計の歴史と発展 深部体温計 体表に装着するだけで核心温を測定、体温のバイオロジー. 180-183、メディカル・サイエンス. インターナショナル株式会社(東京)、2005.
- 21) Yamakage M, Iwasaki S, Namiki A. :Evaluation of newly developed monitor of deep body temperature. J Anesth, 16, 354-357、2002
- 22) 相原彌徳、相原まり子：水銀体温計と電子体温計の比較. 医薬の門, 29 (5)、247、1989
- 23) 君島邦雄、池田 誠、村本 裕：テルモの予測式電子体温計について. 人間の医学, 29 (6) (通巻169号)、402-409、1994
- 24) テルモ体温研究所：体温に関する情報サイト 2008年10月31日 <http://www.terumo-taion.jp/>
- 25) 日本工業標準調査会審議. JIS T1140 電子体温計、日本規格協会発行、2005
- 26) 西山 豊：電子体温計の上手な使い方. からだの科学, 160、26-31、1991
- 27) テルモ社コアテンプ使用説明書：製品の目的・概要／特徴